



中央建設株式会社

代表取締役 渡部 功治氏

ゼロから立ち上げた ミニ・ゼネコンが軌道に乗った



代表取締役 渡部 功治氏

取材・構成 ● 西原 勝洋
経済評論家

東京に支店があり、細々とではあれ営業を続けていたのではない。愛媛県今治市での土木事業は継続しつつ、社長が裸一貫で東京に出てきて、つくり上げた会社だ。規模は小さいながらゼネコン、すなわち総合建設業。東京で最初に事務所を構えてから6年の歳月を経た今、軌道に乗ることに成功したのだ。

**地方都市で「守り」の経営か、
いや東京で「攻め」だ**

中央建設は創業69年。今治市では老舗の土建業者だ。現在の社長、渡部功治氏は4代目になる。といっても世襲ではない。

2005年に専務として迎えられ、2008年には社長に就任する。しかし世の中は平成の大合併が進み今治市も例外ではなかった。



ミーティングスペース

公共事業の予算がどんどん絞られてくる流れの中でこのまま地方で事業を継続することに限界を感じはじめた。大きな転機は2008年に訪れた。社長に就任したこの年に待望の長男が生まれたのだ。その子を見ながら、「この土地で、この仕事を続けていくべきか」と悩み続けた。

そして多くのチャンスは地方よりもやはり東京にあると考え、思い切ったチャレンジすることを決意する。渡部氏は週のうち2、3日は上京し

て街を徘徊した。得るものは何もなかったが次の週も上京して同じ様に歩き回る。その次の週もまた次の週も…いつも空振りばかりで収穫はなかったが何度も繰り返して上京を続けた。それは愛媛においては想像にしかないが、実際に東京に行って考えなければ絶対に答えは見つからないと思っただけだ。

「いまのうちに人員減らしのリストラをして、守りに徹するか」と考えたこともあった。が、それは性に合わない。「攻める」しかない。どう攻めるか—そのヒントを見つめようと捜し歩いたのだ。

結論は早く出た。「東京でゼネコンを始めよう」と。が、なにもない場所、どう取りかかると問題だ。ひとこととゼネコンといっても携わる工事の規模も責任も専門業者とは違う。リーマンショックの影響も相まり、信用力をつけるのも並大抵のことではない。

事務所もなく、ビジネスホテルに泊まっていたのは、初めから相手にされないだろう。



安心安全を表現したキャラクター

そこでワンルーム・マンションに居を移し、新橋に15坪の事務所を借りた。少人数だが社員も雇った。が、仕事がない。ようやく手にした初仕事は50万円ほどの仕事だった。

従業員から「私たち、給料をもらっていないのですか」と言われたこともあった。

無事安逸よりも夢に賭ける 人材が集まってきた

それでも、ようやく大手ゼネコン清水建設から仕事をさせて頂き、細々とはあれ「ゼネコンを目指す活動」が続いた。そんな折、人を介して紹介されたのが、清水建設の西東京営業所部長だった伊藤直治氏だった。

やがて他のゼネコン大手の仕事も手掛けるようになると、伊藤氏はゼネコンごとのカラーに合わせて上手く仕事を取るためのアドバイスをしてくれた。

伊藤氏は定年退職後、コンストラクション・マネジメント会社に再就職することが内定していた。ところが、伊藤氏は定年になる直前、胸部大動脈破裂で倒れ、大手術を受けた。半年間のリハビリ中に、伊藤氏は思った。

「コンストラクション・マネジメントの仕事は面白いだろうが、自分から開拓することはできない。一度死にかけたことで自分が今まで経験してきたことを社会に還元する、と言うと少し大袈裟だが、誰かに引き継ぎたい、伝えたい」



取締役副社長 福田正勝氏 取締役社長 渡部功治氏 専務取締役 伊藤直治氏



新たに頼もしい参謀が加わった。福田正勝副社長である。福田氏は、

1972年に三井住友建設(株)(当時三井建設(株))に入社し、建築本部リニューアル部長、建築管理本部プラント部長、横浜支店長、東京建築支店長を歴任し、2012年に代表取締役執行役員副社長、そして2014年に常勤顧問となっている。

「私も根っからの技術屋。ずっと現場に立ってききました」と話す福田氏だが、キャリアをステップアップしてい

く中で、管理の仕事にも携わってくるようになった。

そして赫々たるキャリアを積み重ね、いつの間にか定年の年が迫ってくるなか福田氏もまた技術屋として後世に何か残せるものはないかと、リタイア後の人生を模索していた。そんな時に出会った渡部社長は福田氏に対して

も自分の夢を語り三顧の礼を尽くす。「何度も何度もお会いして頂き、何度も何度もお願いしました。」と話す

渡部社長。他社からもたくさんの引き合いがあったなか、その熱意に動かされ福田氏も中央建設を選んだ。

いま中央建設には経験豊富な大手ゼネコン出身の技術者が多数在籍している。技術者のみならず、大手ゼネコンの役員や管理職を務めた方が中央建設の役員として活躍している。みんな関連会社で天下れば、無事安逸を貪れるはずだった。

が、渡部社長の熱心な説得があった。それ以上に本人たちが「無事安逸の余生を送るよりも、大きな夢に賭けてみよう」と情熱を燃やしたことが大きい。

それに対して渡部社長は「この小舟に乗ってくれた方々が、昔の同僚や部下に会ったとき、

恥ずかしい思いをすることがないように、会社を運営していくことが私の責任だと考えている」と言う。

大手ゼネコンの出身者たちは幅広い人脈と業



界に対する絶大な信頼と安心感を持っており、そういう人達が集まっていることは社外にも社内にも大きな信用力につながる。

発足したばかりの小型ゼネコンだから、営業職や技術職は新採用ではなく、別の建設会社にいた人材ばかりだ。

都内のゼネコン出身者、マンション建築専門会社やリフォーム専門会社出身の社員、また、大手の電気設備会社や都内の中小電気設備会社出身の技術者、あるいは中小の工務店から来た社員など……「建築・電気設備会社の出身者」とは、とても一括りでは語れない多種多様な人材が集まっている。

これが「大きなプロジェクトから一般住宅の新築リフォームまで電気設備を含む建設に関するあらゆる部門をカバーする」態勢につながっている。同時に、多様な部門から集まった社員たちが、それぞれ貯えてきた知恵を出し合いながら、切磋琢磨していくことが中央建設の上昇力につながっている。

渡部社長は伊藤氏のそんな思いを知ると、伊藤氏のもとを何度も訪れ終始一貫して東京でゼネコンを目指す大望を語り続けた。そして「ぜひ、うちに来てください」と何回もお願ひし、これに対して伊藤氏は「俺、社長の夢に付き合おうよ」と答えた。渡部社長はこの瞬間、闇の中に一筋の光が見えた気がした。そしてこれからは勝負だと強く感じた。

また、その2年後の2017年には



新豊洲プリリア・ランニングスタジアム

「ETFE膜の大規模建造物」を日本で初完工

「小さいけれどゼネコンですから、これとこれが専門などと特化はしな

い。地域にもこだわらない。どこの地域にも出掛けていく、強い会社」を指します」と渡部社長は言う。

「大手ゼネコン出身者が多数在籍している中央建設はその技術力はもとよ

り、大手ゼネコンにない小回りも利きます」——これが中央建設の売りだ。さらに、「リスクを負って信用を得

る。信用を得るにはリスクを負わなくてはいけない」と渡部社長は常々思っている。リスクを負わずに身

軽に構えてはいけないのだ。

そうした中で昨年末、中央建設は大きな実績として障害者スポーツ施設「新豊洲プリリア・ランニングスタジアム」を元請けして完工した。

全長109メートル、幅16メートル、高さ8.5メートルのかまぼこ型だ。カラ松材でフレームを造り、ETFEという薄くて軽く透明なフィルム膜で全体を覆った造りだ。オリンピック関連施設の建設が進む豊洲地区でも、ひとときを目立つ。

ETFE膜構造を採用した大規模な建造物は日本でここが初めてだった。フレームが完全に連結するまで、どう支えるかが難題で、協力会社と協議を重ねた。

商法の上で言えば、今でも本社は今治市だが、東京の営業実績拡大に伴い、今治市を

「本店」、東京を「本社」と改めた。愛媛の県都、松山市にも事務所を開設した。

昨年、渡部社長は6年間の単身を経て新たな居を構え、今治市にいた家族を東京に呼び寄せた。中央建設はもう完全に東京が中心になったのだ。

「家族と一緒に住むようになると、何から何まで、みんな変わります。気持ちの持ち方というか、心のゆとりとゆうか……そして家族が東京へ来てから不思議と物事がうまくいくんです。何だかよくわからないけどワークライフバランスが充実しているからでしょうね。」このことを話した時だけ、「頑張るぞ」と書いてあるような顔がほころんだ。

(にしはら かつひろ)

中央建設株式会社

- 代表取締役 渡部 功治
- 創業 昭和24年1月
- 設立 昭和40年3月
- 資本金 3800万円
- 従業員 60名
- 売上高 30億円
- 事業内容 総合建設業
- 本社 東京都港区芝2-1-30
菱化ビル2階

■ 電話 03-3457-8181(代)
■ <https://www.chukensetsu.com/>

東京都民銀行 日本橋支店会員